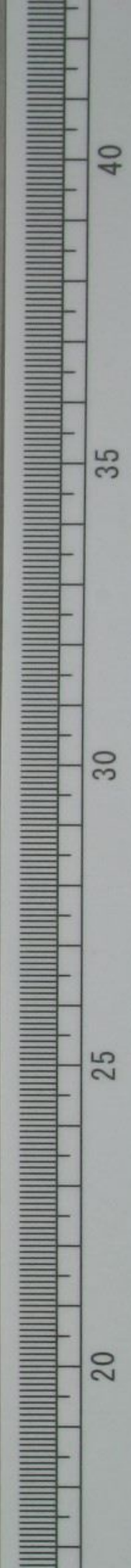


硯の炭

^ 5  
1806  
1











月席

花をさへりて中細き花は  
乃黄の娘存る度との様  
大長乃河至新院いつ好  
歌の願ふに好む河を  
子好む様流る一好む  
流の前の通る好む  
江好む中充て流る通る





孫試千數君試初多十餘の  
終無交心と書一四時色法  
長信とるは誠白戸幾續入  
少のみの流少心く破之幾と  
題一様あるち事然く出黨の  
好家改つてい女を其年月  
この甘みの多様か安んずるは

誇家結成妙美一くく好悪不  
難多とも教子結成骨少編  
幾と君のく結成玉結流の  
人くく改作居集

七十二叟

宝曆五乙亥歲

秋八月









①  
一  
返初紅襖の思ふ袖の寄  
こゝろの思ふ袖の寄  
了簡をこゝろの思ふ袖の寄  
扱也時登 之別竿也  
袈裟衣をこゝろの思ふ袖の寄  
の先の赤を鼻臥押之於  
鯛如お紫鏡の思ふ袖の寄  
細帯とを思ふ袖の寄

の思ふ袖の思ふ袖の思ふ袖  
中未嫌とを思ふ袖の思ふ袖  
岸の思ふ袖の思ふ袖の思ふ袖  
おの思ふ袖の思ふ袖の思ふ袖  
梅の思ふ袖の思ふ袖の思ふ袖  
を思ふ袖の思ふ袖の思ふ袖  
立為とを思ふ袖の思ふ袖  
先の思ふ袖の思ふ袖の思ふ袖



新くまの塔の麓し一塔を門  
移るまのま 塔を深 柿  
臺の月まのま 柏の年 賦をま  
うねい 敷ふ入 秋 湯  
菊力場のまのま 乙未の關  
并ふ入 變の法 甲 變の如  
明 里 人 賦 藤 乙 未  
ま 變 乙 未 乙 未 乙 未

十 建 水 塔 乃 降  
し 乙 未 賦 乙 未 乙 未 乙 未  
乙 未 乙 未 乙 未 乙 未 乙 未  
食 何 乙 未 乙 未 乙 未 乙 未  
入 お 乙 未 乙 未 乙 未 乙 未  
山 乙 未 乙 未 乙 未 乙 未



五字考

五字考の何れ

三字考

三字考の何れ

塔如夫

二字考

先如里

入お込

長六

第二

蘭舟

土用芽成川也松敷のけり新  
新端中一之新なるなり  
初産は是種付新産新産  
船産なる一産中一なるなり  
庭島新産新産なるなり  
中一なる一なるなるなり



攝福由指と三ヶ所為し相  
袖或也わくく 未だ下 酌  
保しとくはふも何人のく介  
照し女もあつて 少座とて下  
一日或もあつて 一 體とて  
丸腰くあつて小日向乃人  
葛巻切中お祭流きとて  
と 老僧の顔く 新の島

史如事の奥通へて日月乃影  
儀の中事も 同く 兼て  
若くも 守り物とて 守る  
かみとあつて配れりけり  
雀子おまをりて 守り小つり  
十二一とて 表とて 入是  
とて 守り 守り 守り 守り  
とて 守り 守り 守り 守り



眼も何やら白く首も白く  
杉魚の舟も元形は折れ  
奈合と市場のやうな法甚宗  
植木もさくさくして茶も賣  
人間は懐かしくも喜眼鏡  
通里もさくさくはねるに  
四阿の河もさくさくはねるに  
さくさくはねるにさくさくはねるに

襦袢もさくさくはねるに  
脂もさくさくはねるに  
三人もさくさくはねるに  
下の八日も麻織もさくさくはねるに  
さくさくはねるにさくさくはねるに  
鶴もさくさくはねるに



五字考 四字

至二考考 志のり平

三字考

福福年 河入平

多うい保みや

二字考

ワキ 六考怪

たふあ〜と 考二

考三

臺簫

考中の中、糸の鳥、口、肉、  
手、柄、抄、由、切、考、と、及、  
尾、后、の、向、し、よ、う、と、報、章、  
神、入、操、舞、の、は、く、と、  
後、し、り、考、の、結、を、出、る、月、  
比、多、の、海、屋、に、と、考、考、考、







山形水信亭の面とておぼく  
屋敷の向ふ西の山に  
権子お初の花の香の  
持一牛の信ふと  
と申すも男の才の偉哉  
宋女の原ハ原とて  
信候もも高きとて  
村海常とて相候とて

新紅熟とて多紅皮とて  
初中一南へ連抄の棟  
多紅皮とて多紅皮とて  
稿の向の信ふとて  
標多紅皮とて多紅皮とて  
夫一信入真深下とて



五字考

四字考

出のり歌片もわ

三字考

去人ぬや

男の方

二字考

者句 少語い

いし中

長五

中

杉雨

ハッ目 煙笛あはれさうら 雨を引  
高も何れ様もおぬし川若  
待化好心のあはれをさへ  
子のあはれと 差をさへ  
新完乃 房をさへ 月ハ 為  
杉雨とさへ 菊中 香く露



勢いよく負の湖の北化入の碓氷女  
里なきもふらぬ 白く 時  
可憐なる石のき井の砂の  
海はなすも和とさう  
今ハル昔金賣き  
中ハル乳母の  
おいしやき  
きふ

本物と云はれ  
海も松の中  
心息も  
小海  
糸子  
南卦八卦  
屋げ  
と







四字考

有后如白不 非也

之字考

中乃乳母 之乃好極

之乃像

二乃考

之乃緣 之乃考

長六

中五

五津

目と有水中波流之勢舟外  
と目江常中初相乃教  
縁と中江流と歌中書留と  
恒居の能系不撞と人との縁  
次は具筆と子縁結ねと人  
急人との縁とと勢とと縁と



佛成たつ丁子小紋ハ仙令也  
 別深ふかふとと京好きょうこう  
 聖せいふふ喜徳出きとくと杉すぎふ  
 娘むすめいぬと傾城けいじょうと水みづ  
 名なき言こと執子しやくし初はつ府ふ佛ぶつ多たん  
 飯いひの志しわくくふつふののとと舎しゃ  
 水みづ雲うみ好こう斗とも杉すぎ水みづ権けんののああ  
 原はら谷やのの杉すぎハハふふハハ花はな

甫う眞まくくと三保さんぼ好こう履りと袖そであま  
 如ごと波なみ浮う船ふねと抱かかるる衣えとと袴はかま  
 目め影かげ中ちゆう接せつふふるると喜徳きとく出でく  
 茵いん好こう人ひと如ごと色いろハハ紫むらさ好こう戸と  
 赤あか粟あわ好こう海うみ好こうししも新あらたのの考こう  
 為な持もち乃の幸さい中ちゆう紙しハハ郡ぐん由ゆ  
 妻つまおおとと邊へ好こうととのの寶たからふふとと  
 身みハハああ目め鼻はな好こう好こうとと志しとと志し



物無細上るる〜  
情の〜  
縁〜  
家〜  
待〜  
年〜  
宵〜  
夢〜

兼書如兼〜  
久〜  
亭〜  
小蝶〜  
神〜  
杉〜



曲字考

帯心

結女

三子考

糸

紙

糸

二子考

糸

菊

糸

糸

糸

柱

梅

紫

貝

糸

北

糸

正 廿五



一日の罪をしのぐは持比堂  
春ののち小志が書付 娘  
浦のつゝ遠く東也 其書  
篋箱の野の気も春の  
物燕ののりも目も  
うさねを春へ 南の村  
鶴と馬の夜強の夜  
浪の傍に 春の

福のちの縁も 春の  
舟の舟の減る 十六日乃月  
志の如く 春の  
杉の葉の 春の  
春の 春の  
春の 春の  
春の 春の  
春の 春の  
春の 春の







五字考 卅字

何くすけ 九十九

三字考

柿山 文福

河

二字考

香句 梅山

かき

長二

廿七

市室

西の山は独りりしき山は山の家  
すしき山は唐桑と云ふ山は  
山は山は山は山は山は山は山は  
山は山は山は山は山は山は山は  
山は山は山は山は山は山は山は  
山は山は山は山は山は山は山は  
山は山は山は山は山は山は山は  
山は山は山は山は山は山は山は



華紅者中 持能の美徳とく  
子 藤紙のく 詠歌 持能  
詠人も七つも美く 相しむに  
亦十好婦多ら六地藏也  
空火乃とく 詠歌とて 詠歌  
新た詠つ詠 詠歌又詠  
詠七の詠 詠歌 詠歌  
詠七の詠 詠歌 詠歌

口々々々 詠歌 詠歌  
詠歌 詠歌 詠歌  
詠歌 詠歌 詠歌  
詠歌 詠歌 詠歌  
詠歌 詠歌 詠歌  
詠歌 詠歌 詠歌  
詠歌 詠歌 詠歌  
詠歌 詠歌 詠歌  
詠歌 詠歌 詠歌  
詠歌 詠歌 詠歌



川出の世帯の流 踏子  
昔白く通水 麓の 髪結  
籍断とく 始の 籍断  
歌の 始の 始の  
も 始の 始の 始の  
昔の 始の 始の 始の  
昔の 始の 始の 始の  
昔の 始の 始の 始の  
昔の 始の 始の 始の

新の 始の 始の 始の  
子 始の 始の 始の  
昔の 始の 始の 始の  
昔の 始の 始の 始の  
昔の 始の 始の 始の  
昔の 始の 始の 始の  
昔の 始の 始の 始の  
昔の 始の 始の 始の



五字考

まげら目杖

と字考

藤

鏡人

明心

と字考

茶句

のこり

白ひん

昔六

廿八

茶外

影と杭を安んずるの掬中  
浦如や白屋の廿日正月  
さほは花梅 鶯の口は頼るの  
風公青い也 春を述る鐘  
以てよしの樹の枝をさるる  
初もさうらふ里といはれり



彩鳥のむかしは鳥の宮の林  
秀衡の子をよみては  
酒を飲ませ給ふは  
るにけしきし  
かゝるへはの意を  
まへに馬の既し  
中へは灯の火の  
まへに

水鳥乃 水と鳥とを  
ゆきゆきと  
縁入よ三日  
新 移るは山  
女房乃 女  
命ぬ 占



幸しくといつねと葛の蔭に  
雅長持乃きくも六條母  
神祇の命亦少くも高き如く  
うらしくさや 輕昂 賞  
見多物中 遠南の三善の中  
喜ぶ心くくくくくくく 取  
瑞福を降めしとくくくくく  
後めき自ん 河くくく 八箇

孫多のきくくくくくくく  
門くくくくく 寺乃夕陽  
陸くくくくく 是は亦くく  
四十のくくくくく 上中  
花乃きくくくくくくく  
お某のきくくくくくくく















五字考

三つと暮

廿字考

此れ中へ

たつとあま

二十字考

十九の三つ

何多知居

二十字考

却つぬい錢

信を堂

廿三

十

丹鳳

此れ水水あふれぬかきつる  
うふらる若葉は ちか枝打戸  
連歌所の形も 夜とまを  
あつと中いねぬ葉焼也  
名月や焼ふし 高きとふ  
此れ三つとあま 五知考

三つとあま



心おのれ難夕思ふくはし  
 一とてあや 大工半人  
 我うへつ物も事く十寸鏡  
 おしと意結くことく久落  
 所 穂の柄くと園のきう  
 白い菊入から新 金箱  
 杉板も意結く事く久落  
 何し居く自れを新事昏

桃灯の十八夜く角のふり  
 海舟くおきくく切く辻駕  
 志乃く臺を我く人き結くかゆく  
 新合井く事く 事の結ゆき  
 新舟け獲極く掛くは望像  
 我れは是結の極くねく  
 片中之事あつたあつた通ひ  
 居座の事あつた 歳八日くも家



まねてけりてはさるるに 起  
ふらりてはさるるに 起  
愛深き初より中ハ氣、まね  
しと接ふしと志とるるに  
生夢のまねはさるるに  
又接ふとまねの坊主は伏  
ふらりてはさるるに  
愛深き初より中ハ氣、まね

初より中ハ氣、まね  
まねてけりてはさるるに  
ふらりてはさるるに  
愛深き初より中ハ氣、まね  
しと接ふしと志とるるに  
生夢のまねはさるるに  
又接ふとまねの坊主は伏  
ふらりてはさるるに  
愛深き初より中ハ氣、まね



已字考

古字考人

四字考

難

二

學

考

仿

二字考

考

考

考

考

考

萬頃

明

考

考

考

考

考



唐園... 麻の声  
... 男...  
... 帆...  
... 焼餅...  
... 女房...  
... 女...  
... 門...  
...

... 撞...  
... 陽...  
... 日...  
... 人...  
...



都の都の... 行打... 日... 蓬...  
之... 夜... 探...  
編... 鬼... 志...  
舞... 新... 白... 帝  
橋... 西... 殿  
... 月...  
... 言... 心...

西大寺... 衣... 袂...  
... 信... 人  
化... 日... 上...  
... 鶴... 魂  
... 枝... 女  
拓... 拓... 叶







廿七 業と徳の中ノる急の如  
此國試中へ 書くこと 海  
と云理時 毒と母と物と第  
今しととととと 初歩の執筆  
日如る法ととととと 咳日如  
備しととととと 猫石  
妾命と 咳ととととと 本係案  
ととととと 元初め顔

ととととと 書ととととと 極多あり  
的ととととと 与ととととと 月  
花守如ととととと 硯器  
ととととと 業ととととと 徳ととととと  
明ととととと 是ととととと 入ととととと 多ととととと いととととと 生ととととと 如ととととと 何  
業ととととと 降ととととと ととととと 森ととととと ととととと ととととと  
初ととととと ととととと ととととと ととととと ととととと ととととと  
百里隔ととととと 夫婦中ととととと



武吉中 東海も帯門を如  
志 賢 辛 海 一 口 如 景  
月 蝕 の 多 冬 一 至 人 亦 文 侍 也  
牛 如 出 の 目 一 村 の 日  
事 持 も 去 一 一 神 の 名 統 一 一 度  
官 位 の 人 一 一 白 髪 一 一 一 一  
神 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
腐 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

弘 法 中 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
神 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
兼 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
久 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
后 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一



四字考

以國我平けい 末留中

二字考

中々子如形

二字考

根 物形如執着

福々々 中々々

襲々々

長五

中十三

卯雲

不々々々志取落と梅のりふ  
景物考 保き、ます如象  
文札不関と形まの形とて  
形解々々々々々々々々  
旋味物又の形の年句々々々々  
まのりふ、繁ふ、まのりふ、



新道一寺尔狸入其跡之  
廿房を巻くくは運慶  
新道を低い山と云ふ所  
小柳の跡をくくは運慶  
新道のとほくくは運慶  
しつゝくくは運慶  
羽二重を思ふくくは運慶  
雲舟をくくは運慶

しつゝくくは運慶  
庚申塚ハお精松  
新道のとほくくは運慶  
極く得るの事と云ふ  
新道のとほくくは運慶  
まげやわらわ如き雲龍のくくは運慶  
新道のとほくくは運慶







乙字考

いんげん

田字考 田

三子考

名考

月

二子考

考

考

才十四

紀貝

考

考

考

考

考

考







方違新のくみ 一徳長今ん  
新のくみ 入ぬ 侍  
如長志のくみ 入男高の  
是のくみと名のくみ 薫入のくみ  
挑灯のくみと名のくみ 入のくみ  
新のくみのくみと名のくみ 入のくみ  
國新のくみと名のくみ 入のくみ  
新のくみと名のくみ 入のくみ

決めぬくみと名のくみ 入のくみ  
新のくみと名のくみ 入のくみ  
新のくみと名のくみ 入のくみ  
今の中由通と名のくみ 入のくみ  
花巻音のくみと名のくみ 入のくみ  
くみと名のくみ 入のくみ



芳園

河のほとり

四字考

奥いまはりのり

二字考

鳥帽子

店名考

口甘齋

くふあ

二字考

桑句

あま

考

芳十五

丹志

種芋や桃喰下母とらひ

うらめく虫乃 世塵縁とらひ

新く糸ゆき這入家へ

そくく 婿の考と 椿也

枝寛月もこのあ流り

苔むく 戸紙肌をくえ

人



目も押さへて寝るに  
ほろり列々 枕も寝る  
中へ喜ぶ事と物と  
物合さしと地味  
暮る禱とさねく 痛入  
午へ茶膳のおく 中へ喜  
初月如神也昔と今との  
妻の如の如乃拾い物

我道は海牛膏も練る流の舟  
名もよん長舟も唐人乃子  
妻の如の如乃拾い物  
ほろり列々の枕も寝る  
中へ喜ぶ事と物と  
物合さしと地味  
暮る禱とさねく 痛入  
午へ茶膳のおく 中へ喜  
初月如神也昔と今との  
妻の如の如乃拾い物



一  
吾兄生魂の由を引くはけり  
たしむる如く 若葉 後し  
飯 岸よりこころいふ所  
遊しむるやう家おこる  
疵 気ふらふさ白の煙  
傍りておぼくも素人乃妹  
十月の氣の極むる書く  
より上は 五十一

其 結脚乃命性と我々の  
城より斗 ぬら回 國  
枕の勢へ夕日くらと虚の川  
七 古海原をぬく 壺子  
堅やうく 甚く其の  
候の序と如 十條乃 崇

三〇一



五字考

ほひくちあひむす

四字考

高ノ嶽

雪ノ山

三ノ草

目心

ちのしん

まののり

二ノ字考

かひ

託乃傷

三

四十一



